

かも 市史だより

平成12年3月

No. 1

編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



伝源義綱木像(小貫・義綱公神社蔵)

あたらしい

加茂市史の編さん始まる

加茂市史の編さんにあたって



加茂市長 小池清彦

市民の皆様におかれましては、口頭より市政の万般にわたりまして、ご指導、ご協力を賜りまして厚く御礼を申し上げます。

さて、加茂市におきましては、現在新たな加茂市史の編さんに取り組んでおります。

昨年二月に市史編さん委員会を発足、市長を会長とし市議会、教育機関、商工会議所、農協、連合婦人会の代表及び郷土史家、市の特別職の十六名で構成されておりますが、この委員会におきまして市史の大綱を審議し決定をいたしました。

そして、市史の調査や執筆、編集にあたる編集委員会の監修者を、新潟大学の溝口敏廣先生(加茂新田在住)にお願ひし、編集委員五部会二十名、調査委員十名、事務局の編さん室職員八名の体制で資料の収集・調査等を行っております。

市史編さんの目的といたしましては、古文書、歴史資料、文化財などを調査・整理し、後世に伝えることが最も重要

と考えます。

そのため、少なくとも

① 学問的批判に十分耐えうるものであること。

② それぞれに古い歴史と伝統を持つ、加茂、上条、下条、七谷、須田の各地域の歴史を詳細に記述したものであること。

という条件は満たす必要があらうと思えます。

刊行計画といたしましては資料編、通史編、地域の歴史編を平成十八年度まで全部で八冊の刊行を予定しております。しかし、発刊の年度や冊数につきましては、収集する資料の多寡や内容により編さん作業の進捗度が異なっておりますので、後世に残る市史を発行することを第一に、柔軟に対応してまいりたいと考えております。

どうか、市民の皆様には、市史の編さんにつきまして、ご理解を賜りますとともに、積極的に資料などの情報をお寄せくださいますことを心からお願い申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。

監修にあたって

新潟大学教授 溝口敏磨

いまなぜ加茂市史？

どんなことをやるの？

加茂市は、かつて市制施行二十周年を記念して、昭和五十年（一九七五）に『加茂市史』を発刊しましたが、編さん期間が限られていたため、十分な調査ができませんでした。その後、高度経済成長がもたらした産業の機械化や文化生活の普及で、何代にも渡って受け継がれてきた生業と生活環境が一変し、生活意識も様変わりしました。

市史編さんの事業では、加茂の歴史を叙述した通史を刊行するだけでなく、郷土の歴史に関わる市内外の歴史資料をよく調査し、目録や資料集を作つて、貴重な資料がきちんと保存され、後世に引き継がれるようにすることも大事な仕事です。編さんの対象となるのは古文書だけではありません。考古遺跡と遺物、文化財や建造物、さらには有形無形の民俗・生活資料など、多方面にわたります。

情報をお待ちしています

市史編さんには、市民の皆さんの協力が欠かせません。古文書はもちろん、古い写真や父祖の日記・手帳類はありませんか。昔の生活や戦争体験を語っていただくことも、大きな力になります。地元で伝わる開拓伝説や昔語りも、ぜひ聞かせてください。調査活動が本格化するにつれ、いろんなかたちでお世話になります。どうぞ宜しくお願い致します。

加茂市史に望む

市民の皆さまの興味や関心を内容に反映させることで、親しまれる市史をつくりたいと思います。今回は3名の方よりご意見を頂戴いたしました。

歳月と経費と



文化財調査 審議会委員長 古川信三

第二次加茂市史編さん事業が発足した。待望の感が深い。第一次の市史が昭和四十九年度にできて、僅か二十五年間にして第二次を要望する所以はなんだろうか。第一次市史編さん委員の唯一の生き残りとして、ふり返つて見たい。まず指揮者のいないオーケストラで、各地区の記述や文章に統一を欠き、思い違いがあつても気付かなかつた。例えば古代の越後国の変遷などで、監修者の必要を痛感する。また近世までの記述が年表の説明方式で、ともすれば青海神社と新発田藩の歴史と見紛うような誤解が生まれた。千余年の歴史を単独で執筆し、青海神社以外に資料を求められなかつたことが、上条・猿毛・狭口の歴史に欠ける結果

になったといわれよう。

七谷地区は山崎家文書が整つていたが、下条・須田地区は資料収集の余裕もなく、須田地区は中蒲原郡誌によらねばならなかつた事情があつた。

七谷地区は松永克男先生（現加茂市史編集委員）から監修役も兼ねていただき、手前味噌ながら「第六編七谷は、当市史の中では最も要領よくまとめられている。この部分を執筆した人は、余程、地方誌の構成に長けている」（地方誌新潟第九号）と評されたのも監修のお陰である。

もともと、第一次加茂市史は財政困難な加茂市が、市制施行二十周年記念事業として、僅か二年半で編集したもので、費用も零に等しいくらい僅少であつた。市史の編さんは歳月と経費を惜しんではならぬ。新市史刊行計画に依れば、通史編は平成十七年度になる。その年九十歳を数えなければならぬ私には、読む機会が与えられないであろう。残念なことである。

新加茂市史編さんに寄せて



加茂商工会議所 会長 長澤吉男

先年、加茂市と友好関係にあるロシア、コムソリスク、ナ・アムレ市を訪問した時のことです。見学した小学校にコムソリスク市の歴史が一目でわかるように立体的で立派なパノラマ展示がありました。市の博物館には更に大きな展示があり、六十年前にアムール川を下り、町を建設するために上陸した人たちの巨大な銅像が川辺の公園に、建っていました。自分たちの先祖が、どこからきてどんな風に町を作り、どういう生活を送っていたかがよく分り学習できるようになっており、歴史を大切にしているという印象をうけました。

加茂市には、残念ながら、こういう施設はありません。目で見て分る施設がなくとも、どのような仕事で生活をしてきたかを解明し分りやすく説明することは可能で、これが新しい市史の役目の一つではないでしょうか。

古代、中世だけでなく近代加茂の産業や農業の生い立ちや変遷、人々のなりわいや生活、戦時中の困難な環境などをぜひ、取り上げていただきたいと思えます。

加茂商工会議所は今年十一月に創立五十周年を迎えます。産業の勃興や商工業の盛衰などを簡単にまとめた記念誌を作るため、会員の方々に資料や写真の提供をお願いいたしますが、新市史にも活用いた

市史編さんへの思い



八幡一丁目
中野利枝

私が古文書講座や、ふるさと歴史探訪などに仲間入りさせて頂いたのは、定年退職を終えてからでした。それ以降神社仏閣の拝観やら、古文書の講座に出席させて頂いたりして、見聞を広める機会を得ることができました。平成八年には、市内の遺跡から初めて古代の木簡が発見されております。木簡だけではなく、それらを発掘の上、遠く時代

を溯り資料の研修をなさる方々には、いつも頭の下がる思いでお話しを伺います。孔子の教えにある温故知新、まさにこの言葉通りだと思えます。私達の加茂市には古い歴史と

伝統があり、自然の美しさと、人の和によって生まれた数多い伝説や、碑などが保存されており、歴史探訪と申しても、今までは普通のサラリーマンとして過ごして参りましたので、これらに關してはほんの入口に立った状態ではないかと存じます。この出会いがこれからの人生の指針となり、新鮮さと感動の場面を与えてくれることでしょうか。今回新しい世紀にむけて、新たな市史編さんが行われるはこびとなり、大きな喜びを感じております。

執筆される先生方の卓越した研究が、更に更に深く探究され、未公開のことなどが発見されるなら、どんなにすばらしいことでしょうか。八年という長い歲月のもと、大事業にひとりくみくださる方々、ほんとうに御苦労様でございます。どうぞ健康にご留意いただき御奮闘くださいますようお願い申し上げます。敬意を表しつつ、市史の完成を楽しみにお待ちしております。一人でございます。

近世加茂の町場形成

従来、加茂の町割りや市場の成立は、「浅野家事績」を元資料とした『南蒲原郡先賢伝』によって、万治三年（一六六〇）とされてきた。しかし、これより十二年も前の「慶安元年（一六四八）加茂下

条境界裁許絵図」（斎藤務氏所蔵）には、道の両側に整然とした家並みで加茂町が描かれており、すでに加茂の町場化がうかがわれる。

慶長三年（一五九八）に溝口秀勝の領地になって以後、同十五年には紺屋・室屋・濁酒屋・商人など商工業者が二十二軒あり、領内三位の集中度であった。この頃、新発田藩からの文書上の呼称も「加茂村」や「加茂町」の表記が混在していた。

慶安の後の承応四年（一六五五）以降では、加茂近隣村々を治める大庄屋は、浅野三郎右衛門・吉田問兵衛・福原伝右衛門の三人が確認でき、中でも浅野家は慶長・寛永期から大庄屋的役務を帯び、加茂の町割りや市場の成立に意を注いでいる。

こうした中、加茂の「町年

加茂の町並みはいつごろから形作られてきたのでしょうか。文献により探ってみましょう。

寄」役が設けられ、実質的な町の長の職務を遂行している。史料上、その初見は天和二年（一六八二）であるが、他の史料などから延宝から天和期にかけて置かれたものと見られる。

この頃の「町」部分は、現在の本町・仲町・宮小路付近であった。その後、加茂に新町ができ、延宝五年（一六七七）には、その町屋敷年貢である地子米が上納されている。この新町は今の上町と見られる。

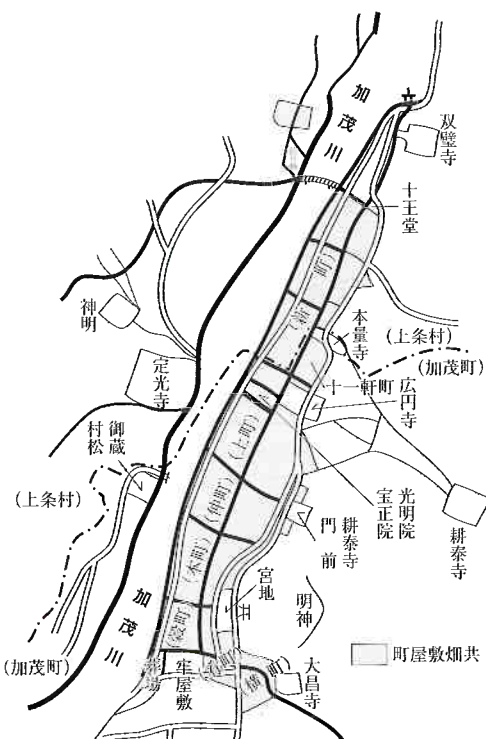
次いで元禄三年（一六九〇）に上条村の新町が、往還道（三

国街道中通り）沿いに加茂町と隣接して町建てされた。これは同年三月の加茂町廣円寺から上条村の材木町・片平町に至る火災復興の町建てでもあった。同年七月に藩から役人も出役し、上条新町の町割りが行われている。

これと同時に、加茂町の上条新町側に十一軒町（現在の五番町六番付近）が成立し、二年後の元禄五年には、宮小路から下、穀町・肴町・横町（総称して下町とも呼ばれる）の新しい町場が成立している（市川浩一郎氏収蔵文書）。

以上が江戸時代はじめの頃の加茂町・上条村の町場形成の概要であるが、今回の「加茂市史」の中でさらにその詳細を究明したいものである。

（近世部会 関 正平）



寛保2年(1742)における加茂と上条の町場状況 (同年の両村絵図から模写)

今とすっかり風景が変わっているたんぼの中をいく
団体客輸送のためMTM3両編成の列車(S.29.5.27 於加茂-陣ヶ峰間)



浦原鉄道は大正十一年(一九二二)九月二十二日に会社創立、十二年十月十日に五泉一村松間が開通した。開業準備がすべて終わった段階で関東大震災が勃発、ひと月ほど開業を延期したとの話もある。陸軍歩兵連隊がある中で、浜田・鯖江・村松が三大僻地といわれていた。そのなかで、鉄道が最後までなかった村松に、漸く電気鉄

蒲原鉄道の思い出

ついに平成十一年十月三日をもって蒲原鉄道も完全に終末を遂げてしまった。昭和六十年三月三十一日、村松-加茂間が廃止され、二一・九kmもあつた鉄道のうち、一七・七kmが廃線になり、五泉-村松間、僅か四・二kmの鉄道に

なつてしまつた。それがその後十四年余り、お客がほとんど減る中で、よく頑張つた心から敬意を表したい。もう加茂の市民にとっては十年一昔と忘れさられた存在になつていくかもしれないが、昭和二十年後半を加茂の陣ヶ峰で過ごした筆者にとつては、蒲原鉄道は忘れようにも忘れられない存在である。陣ヶ峰駅と加茂駅間は常時利用

したコースであり、今のよくな住宅・工場が全くない田圃の真ん中の築堤を下がつていき、加茂川を渡るとすぐ加茂駅であつた。蒲原鉄道は、大正十一年(一九二二)九月二十二日に会社創立、十二年十月十日に五泉一村松間が開通した。開業準備がすべて終わった段階で関東大震災が勃発、ひと月ほど開業を延期したとの話もある。陸軍歩兵連隊がある中で、浜田・鯖江・村松が三大僻地といわれていた。そのなかで、鉄道が最後までなかった村松に、漸く電気鉄

道が開通したのである。昭和五年(一九三〇)七月二十二日、まだ昭和恐慌が終わらないうちに、村松-東加茂間が開通した。しかも気宇壮大な計画で信越本線をオーバークロスして加茂駅に進入し、将来は燕方面に延長の計画であつた。十月二十日には無事加茂駅まで開通している。このような経済状態が厳しい時期に、加茂延長工事を行うことができたのは、金津の中野家の資金援助が極めて大きかつたといわれている。

当初の計画通り、燕まで延長していれば、燕・加茂・村松・五泉と異種産業の交流経済圏も形成できて、今と違つた県央の産業構造になつていただかもしれない。昭和五年五月、加茂開通を機会に、貨物列車の運転に備えて電気機関車を購入している。名古屋の日本車両製だが、電気部品はアメリカのウエストイングハウス社、車体はポールドウイン社のライセンス生産である。この仲間が日本で僅か三両しか残っていないとのこと、幸い村松で保存されて現役で保線に活躍した車両である。

(近現代部会 瀬古龍雄)

部会活動の紹介

監修者を含めて計31名の編集・調査委員は5つの部会にわかれ、以下のような活動に励んでいます。

先土器時代から戦国時代まで幅広くあつかう考古・古代・中世部会は、古墳や遺跡からの出土品や中世の城館跡の調査などを通して加茂の姿を浮き彫りにしていきます。この時代の文書類は比較的少量のため現地調査に重点が置かれますが、江戸時代を調査対象とする近世部会や明治維新以降をあつかう近現代部会では、いかに多くの文書類に接することができるかが調査の決め手となります。そこからこれまで埋もれていた思わぬ事実が明らかになるかもしれません。

また、長い時間をかけて生まれ守られてきた地域の伝承や習慣、あるいは文化財などへは民俗部会と文化財部会が光をあてていきます。時の移ろいとともに関われがちな私たちが受け継いできた財産を、昔話を聞いたり資料の提供をお願いしたりしながら集め、さらなる発展をはかる一助としたいと考えています。

刊／行／計／画

巻名・内容	発行予定年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度
資料編1 (考古・古代・中世)	—	◎				
資料編2 (近世)	—		◎			
資料編3 (近現代)	—		◎			
資料編4 (民俗)	—			◎		
資料編5 (文化財)	—			◎		
通史編1 (考古～近世)	—				◎	
通史編2 (近現代)	—				◎	
地域の歴史編	—					◎

編集後記

この「市史だより」は、事業の進捗状況のご報告と皆様のご意見などを紹介する場として、今後とも継続して発行していきたいと考えています。事務局では皆様からの情報をお待ちしています。資料の年代は問いませんので、左記まで御一報くだされば幸いです。

加茂市史編さん室
加茂市幸町2丁目3番5号
☎(0256)5210080 内線480